

線香原料（タブ粉・スギ粉）

製粉の歴史と民俗

——和歌山県古座川流域・三栖家の
製粉場（線香水車）と製粉工程——

藤井 弘章

第1章 問題の所在と調査方法

筆者は和歌山県の民俗調査を進めるなかで、昭和中期まで農山村で副業的に栽培・採取されてきた榎・棕櫚などに関心をもってきた⁽¹⁾。また、同県有田地方の蚊取り線香会社の社史を編纂するなかで、蚊取り線香原料としての除虫菊やタブ粉の生産・流通にも関心をもつようになった⁽²⁾。とくに、タブ粉に関する文献は断片的で、研究もわずしかみられない。しかしながら、タブ粉は、蚊取り線香・線香（仏壇用）の粘結剤として重要な存在であったことが分かってきた。タブ粉の歴史的な変遷については別稿にまとめた〔藤井 2021a〕。また、九州や紀伊半島などに線香原料のタブ粉・スギ粉を生産する製粉場（線香水車）が多数存在していたことも分かってきた。文献と現地調査によって把握したタブ粉生産の歴史と民俗についても別稿でまとめた〔藤井 2021b〕。さらに、紀伊半島南部の各地では、線香原料の製粉のみならず、線香（仏壇用）製造もおこなわれていたことが分かってきた。紀伊半島南部の線香製造は、現在では消滅しており、民俗報告などにもほとんど触れられていない。和歌山県南部における線香原料製粉

場（線香水車）および線香製造業については、今後も調査を継続する予定である⁽³⁾。

本稿では、和歌山県古座川町に存在した三栖家の線香製粉場（線香水車）を紹介する⁽⁴⁾。三栖家には、明治から昭和初期にかけての線香製粉業・線香製造業に関する資料（文書など）が残されている。また、昭和14年（1939）発行の和歌山県山林会の機関誌『木の国山林時報』、および大日本山林会の機関誌『山林』に、日下部兼道（和歌山県林業試験場）が調査・執筆した三栖家の線香原料製粉場に関する報告が掲載されている⁽⁵⁾。さらに、今回の調査では、日下部報告の取材対象であった三栖民治の孫にあたる三栖民平氏に聞き取りすることができた⁽⁶⁾。民平氏は子どものころに民治の製粉業を見ていただけでなく、のちに自身でも製粉に従事したことがあるという。昭和14年の日下部兼道の報告、三栖民平氏からの聞き取り内容、および三栖家の古文書を合わせると、三栖家の線香原料製粉業・線香製造業の実態を把握することができる。このうち、本稿では三栖家の線香原料製粉場（線香水車）と製粉工程について取り上げる。なお、明治・大正時代、昭和時代における三栖家の線香原料製粉業・線香製造業については、紙数の関係上、それぞれ別稿を予定している〔藤井 2021c など〕。

第2章 製粉場（水車小屋）の立地

日下部兼道の報告では、三栖家の線香原料製粉場は和歌山県七川村と記載されているだけであったが、三栖民平氏への聞き取りの結果、製粉場は七川村佐田に立地していたことが分かった（地図1・2）。



地図1 三栖家の製粉業関連地図



地図2 三栖家の線香水車跡周辺地図

和歌山県東牟婁郡七川村は古座川の最上流域に存在した村であった。佐田は七川村の大字のひとつであり、村のなかでは最も下流に位置し、村の役場が置かれていた。昭和31年（1956）には、洪水防止と発電のため、佐田の平井川・添野川などが合流する地点を中心にして七川ダム（古座川ダム）が建設された。ダムの建設により、佐田では58戸が水没した。七川村は昭和31年に周辺の村と合併して古座川町となった。

三栖家の製粉場（水車小屋）は、佐田の土地にあった。現在の佐田の中心部から、直線距離で約1km古座川の上流にあたる。古座川東岸で、古座川沿いに立地し、支流の黒谷川から水路で水を引いて水車を回していた。しかし、昭和31年に完成した七川ダムに沈み、現在は跡地を対岸から遠望することしかできない（写真1）。ダムの水が相当干上がったときにだけ、水車小屋の上部の一部が見える程度である（写真2）。写真2の右側の土台は隣家の千郷家で、隣家と水車小屋の間には、三栖家の水田が2枚あった。

隣家に住んでいた大正元年（1912）生まれの千郷千畝歩は、幼いころのことを文章に書いている⁽⁷⁾。そのなかに以下のような記述と地図（写真3）がある。



写真1 三栖家の線香水車小屋跡遠景（2020年12月撮影）



写真2 三栖家の線香水車小屋跡（三栖民平氏提供）

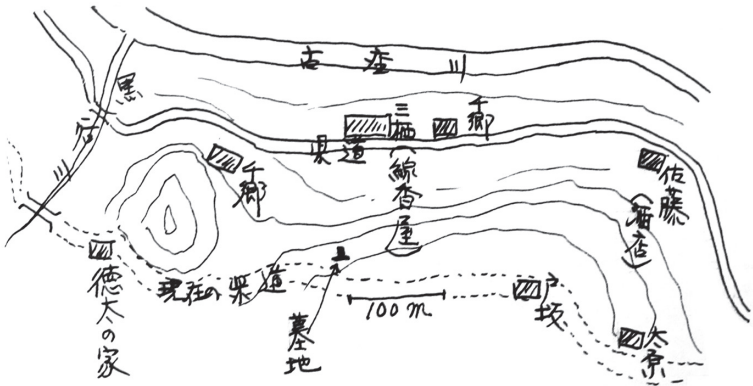


写真3 千郷千畝歩が描いた三栖家周辺の地図

出生の場所は、現在は既にダム湖畔に水没しているが、黒谷橋の奥の佐田上地の墓地の真下約一〇〇メートル程の地点で、県道の側にあった。（筆者要約：隣家がなく、友達も少なかった）（中略）一番近い家まで約一〇〇メートル、こゝが線香屋で大きな工場があり幼児の遊び場であった。（中略）（筆者要約：男の子は弟と近所の子の三人だけ）この三人が、線香屋の線香納屋の薄暗い廊下で遊んだものだ。

千郷は三栖家のことを「線香屋」と記しているが、三栖民平氏も三栖家は「線香屋」と呼ばれ、三栖という名前はあまり知られていなかった、と語る。千郷は、現在の県道沿いにある「徳太の家」のことを「大ぶん高い森の上」にあったと書いている。現在の県道からいえば、三栖家と千郷家

はかなり低い場所に立地していたことが分かる。また、近所の子どもにとってみれば、三栖家の線香水車小屋は「大きな工場」であり、「遊び場」でもあったという。別稿で取り上げるが、大正時代の三栖家は線香原料製粉を軌道に乗せていた時期であった〔藤井 2021c〕。

三栖家には、昭和10年代から20年代ごろに撮影された、三栖家の母屋と水車小屋の外観を撮影した写真が残されている（写真4・5）。この写真からは、母屋・小屋ともに古座川のほとりに立地していることがうかがえる。母屋の北隣に水車小屋が立っており、水車小屋の屋根は杉皮で石を載せていることが分かる。

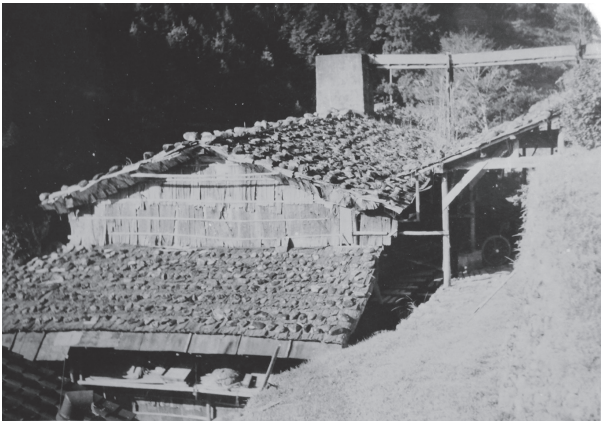


写真4 三栖家の線香水車小屋（三栖民平氏提供）



写真5 三栖家の母屋（後ろの建物が線香水車小屋）（三栖民平氏提供）

第3章 製粉原料の調達

第1節 原料としてのスギ・タブ

三栖家の線香水車で製粉していたのは、線香原料、蚊取り線香原料としてのスギとタブのシバ（枝葉）であった。日下部の報告では、「杉葉」「タブ柴」「原料柴（杉、タブの枝葉）」と記述しており、民平氏も「シバ」と語る。

民平氏によると、スギは線香の原料で増量剤、タブは糊分である。タブの方は、仏壇用線香にも必要であるが、おもに蚊取り線香に用いるという。タブのことはタマグスと呼び、タブの粉は糊粉という。三栖家に伝わる「線香仕上部勘定帳」には、大正から昭和初期にかけての記録に「杉粉」「玉粉」「玉楠粉」「のり粉」「線香粉」などと表記されている。「杉粉」は文字通りスギの粉であるが、民平氏の語りから考えると「玉粉」「玉楠粉」「のり粉」はタブの粉のことと思われる。また、「線香粉」についてはスギ粉・タブ粉の両方を含んでいると思われる。ただし、時代によってスギ粉・タブ粉の製粉の割合には変動があった。概略をいえば、大正末期までは線香原料としてのスギ粉生産が中心で、少量のタブ粉を生産していた。大正末期からは、蚊取り線香産業の発展とともに、粘結剤としてのタブ粉需要が激増し、タブ粉生産に比重を移していった。三栖家における製粉原料の変遷については別稿で詳しく取り上げる〔藤井 2021c など〕。

第2節 スギ・タブの入手方法

日下部の報告では、この地方はスギの植林地が多いため、伐採がおこなわれた場合、スギの葉をきわめて安価に入手するか、三栖家の家族が採取した、と記している。スギを伐採した際に発生するスギの葉は、山主にとってとくに必要のないものであった。こうしたスギのシバは費用をかけずに大量に入手できたようである。民平氏に確認したところ、家族でスギを伐採したところへ行き、集める手伝いをしたことがあるという。また、三栖家に伝わる「日記 明治四拾年 第拾月吉祥」にも、「杉葉拾ヒ」という記載がしばしば出ている。明治時代から昭和初期にかけて、家族が中心と

なり、伐採したスギの木から葉を採取していたことが分かる。すさみ町の井澗家の製粉場などでも、スギ葉の入手は自分たちで集めることもあったという。



写真6 福岡県八女市の製粉場で集めたタブ (2019年3月撮影)



写真7 福岡県八女市の製粉場で集めたスギ (2019年3月撮影)



写真8 平井の集落と山
(2020年12月撮影)

一方、タブについて、日下部は各地に点在するものを買取ったと記している。20年生ぐらいのタブノキの場合、2～3年ごとに、1本につき10貫の枝葉を採取できたという。日下部はこうしたことをふまえて、「造林上の経済樹種となり得るかの様である」と記している。昭和初期には、特用林産物の栽培が全国的に模索されていた。日下部は和歌山県において、檜・棕櫚などの栽培方法を調査研究していたため、このような表現をしたと思われる〔日下部1939c〕。

民平氏に確認したところ、スギと異なり、タブのシバは買い取っていたという。民平氏はタブシバの採集について以下のように語る。

古座川筋にはタブがかなりあった。平井に北大の演習林がある。ほと

んどその周辺で集めていたと思う。女の人の内職だった。(平井の人たちがかなりお金になったということで)平井からおじいさん(民治)が表彰してもらったことがあるらしい。自分の山で切って集めるのではない。雑木を伐るぐらいなので問題はなかった。タブのことは土地ではタマガスといった。探して見つけておいて、集めていただくのは地元の奥さん方。

シバを集めるのは冬場。11月から3月ごろ。それ以外は集まらない。冬でないと買わない。冬の充実したときの葉がいい。新芽のあるものはだめということと思う。歩留まりの問題もある。1年分を集める。1年に1万貫ぐらい集めた年もある。

タブは平井、添野川にはかなりあった。どうやって見つけたのか。(大島にはタブが多いらしい、大島から買わなかったか、と問うと)大島からは買ってない。奥(古座川上流域)で調達できた。(タブはすぐに分かりますか、と問うと)遠くから見ても分かる。そんなにたくさんあるものではない。めどをつけて、行って集めてくる。来年も採らなあかんから、大きな木だと上手に採らんと(採らないといけない)。多い人は20貫(75kg)ぐらい背負ってきた。だいたい10貫(約37kg)ぐらい背負った。(三栖家の製粉場まで)何里も来る。

いろんな人がいるので、(重量を重くして、より高く買ってもらうために)太い枝を入れる人もいた。だいぶ吟味した。枝を入れると木粉になってしまう。シバのねばいところ(粘り気のあるところ)がないといけない。

自分も秤の棒チギの片方を肩に載せて計った。相棒がいる。(1貫いくらぐらいだったか、と問うと)それは覚えていない。

タブのシバを採取する時期は、すさみ町の井潤家の場合でも冬場であった、と語られる。タブシバは近隣の女性たちが採取したものを買い取ることが多かった、という点もすさみ町などと類似している。大正から昭和初期にかけての時期には、このように近隣の女性たちがタブのシバを持ち込んでくるが多かった。7章で紹介するように、近隣の女性たちにとって

は、山を越えてタブシバを持ち込むことは現金を得るだけでなく、食料や日用品を買って帰るという目的もあったようである。

民平氏は戦後になると後述するように九州からタブを調達しようと計画した。そうした文脈において以下のように語る。

九州のタブは木が古いので葉が厚く、歩留まりがいい（粉となる分量が多い）。楽につける（製粉することができる）。若い木ほど粉にするのに苦労する。日陰の葉は敬遠する。葉が薄い。夏はさっぱりだめ。スギでも冬のカングリ（寒切り）した葉を集める。新芽は弱い。充実していない。量もしれてる（わずかである）。冬が充実している。11月ごろから3月ごろまで採取する。それ以外はしない。1年分、確保しておく。

民平氏によると、タブのシバを冬に集める理由としては、冬の葉の方が厚みがあり、製粉したときに量が確保できる点であるという。反対に、新芽を製粉した場合には、葉が薄いため粉としての量が取れないという。

第3節 スギ・タブの乾燥と裁断

調達したスギ・タブのシバは、製粉作業の前に乾燥・裁断しておくことが必要であった。日下部は、「此乾燥が良品を得るに最も大切な条件」とし、1～2か月は風通しのよい日陰に積み置いた、と記している。また、「原料柴」は葉のみではなく、直径1分（約3mm）ぐらいまでの小枝も用いたとしている。乾燥に関して、民平氏は以下のように語る。

（スギ・タブのシバは）束で持ってきた。さばいて小束にして干す。手間がかかる。外で水分が抜けるまで乾かす。生で積んだら、いきってくるから（熱がこもってくる）。（乾燥させると）生シバのときの10～20%の目方になる。乾燥して高う積み上げる。圧がかかるほど、ぱりぱりになって、機械にかけても切りよかった。水分が抜けたときに2階に収納した。

粉碎機はシバカリ機という。ハネキリ、シバキリともいう。（水車）小

屋の2階にあった。ベルトがついていて水力で動かした。粉碎機の中には鉤状になったものがついている。それが動くことで枝を粉碎する。民治の一番下の弟の林吾は鍛冶屋だった。林吾が粉碎機を作った。それまではオシキリだった。太い枝をより出す。粉碎したものを上から落とす。

粉碎機については、日下部の報告では「柴の裁断器」と記しており、民治の考案であると記されている。民平氏によると、民治の弟の鍛冶屋（三栖林吾）が製作したものであったことが分かる。

このように、完全に乾燥したスギ・タブのシバを、粉碎機にかけ、6cmぐらいの大きさに裁断した。葉だけではなく、小枝ごと裁断し、搗臼に入れられる状態に整えた。

第4章 水車・水力タービンと水路

原料のスギ・タブのシバを製粉する動力源は水車および水力タービンであった。先述したように、三栖家の母屋に隣接した、古座川のほとりの小屋に設置されていた。日下部の報告には、従来は水車であったが、調査時には5馬力の水力タービンを設置していると記されている。日下部の調査時には水車から水力タービンに切り替えていたことが分かる。

このことについて民平氏に確認した。昭和6年（1931）生まれの民平氏には水車の記憶があるという。民平氏は「タービンの前は大きな水車だった。自分も知っている。ギー、とって水をためて、ぐるぐる回った。」と語る。民平氏は平井（旧七川村平井、現在の古座川町）と三尾川（旧三尾川村、現在の古座川町）の発電所と同じときに設置したのではないかと、いう。平井発電所は昭和12年（1937）3月に着工し、同年末に完成している〔古座川町史編纂委員会2013〕。民平氏は、自分が小学校2・3年のころにタービンに替えた、堺のミスミ商会が設置した、担当技師は森本という人だった、と語る。工事中に、友達を連れて来てタービンの塔を見せたが、いつも見慣れているはずの自分が塔の中に落ちたという。このような経験もあって、担当者の名前までよく覚えているという。日下部報告と、民平氏の語りから考えると、水車から水力タービンへの切り替えがおこなわれ

たのは、日下部が調査する直前の昭和 12～13 年（1937～38）ごろと推測される。

ところで、日下部の報告には、水車や水力タービンに使用した水のごとは記されていない。民平氏に確認すると、古座川支流の黒谷川に井堰を設置し、そこから 3km 水路を引いていた、という。民平氏は水路について以下のように語る。

黒谷にメドという谷がある。その谷の向こうから水を取っていた。尾の先から水を取っていた。ユセキ（井堰）があった。冬になると水が不足するので、本谷（黒谷）の 200m ぐらい奥に松の木で壁をこしらえてダムを作っていた。多少補っていた。水車のときは少量でも、ギーッと回った。タービンのほうが水量がいる。（タービンに替えたのは）成功だったのか。失敗だったのかも。

トユで（樋）水を水槽に送って、屋根から水を落とし水車を回していた。写真 2 に見えている構造物は、右側が砂を沈める沈砂槽であるという。冬にはシバが溜まるため、籠受けをして、かきだしていたという。左側のものは小屋の屋根の上に設置した水槽のようである。また、水路には、水落と呼ばれる、水を水路から逃がす部分も作っていた。これは、タービンのベルトがはずれたり、焼けたりして、止めなければいけないときに必要であった。

水力タービンについて日下部は、『木の国山林時報』には「落差二〇尺（筆者注：約 6m）水量五個」、『山林』には「落差三〇尺（筆者注：約 9m）水量二個」と記している。このように記述に差異がみられ、詳細は不明である。民平氏に確認したところ、落差は 9m はあったのではないかと、水量の表現は分からない、とのことであった。水車の直径などについては、日下部も記しておらず、民平氏も記憶していない。

水力タービンについては、大正から昭和初期にかけて、日本でも普及し始めたようである。水力タービンにもさまざまな形態があるが、民平氏の描いた図 1 および語りから判断すると、反動水車と呼ばれるものであった

と思われる〔内丸 1954〕。民平氏は、三栖家のものはペルトン水車ではなかった、上からの圧力と下へ引く力とで回る、鉄管は3mほどあった、タービンは圧が決まっているので早くなったり遅くなったりすることはなかった、鉄管の間にタービンがあり真空になっていた、タービンの横に水槽があった、マンホールを開けて自分も水槽に入ってたたびたび掃除した、タービンのほうが水車より水量が必要であった、などと語る。

日下部報告には記述はないが、民平氏によると水車の下の溝の部分をシャミセンドウといい、小屋の前の古座川の淵をシャミセン淵といった。民平氏は、なぜシャミセンドウというのかは分からないといいながら、以下のようなことも語った。

（民治の父親の）丈作は浄瑠璃ばかりしていたという。丈作は三味線をひいた。水音のするところで三味線ひいたという。カンゴエ取るという。

三栖家の製粉業を明治27年（1894）に開始したのは丈作であり、製粉業を継いだのは息子の民治であった。幕末生まれの丈作はとくに浄瑠璃が趣味であったというが、明治生まれの民治も浄瑠璃をよく謡っていたという。シャミセンドウ・シャミセン淵の名称は丈作や民治の浄瑠璃との関連も考えられるが、すさみ町入谷の井澗家の線香水車の場合も、水車の下の溝をシャミセンドウと呼んでいるため、今後も周囲の事例と比較した検討が必要である⁽⁸⁾。

第5章 搗臼機と製粉工程

第1節 搗臼機（杵・臼）の構造

一般的に言えば、水によって水車・水力タービンが回り、それによって得られた動力はシャフトや歯車で伝達され、杵を動かすことになる。杵の下に臼があり、臼の中にスギ・タブのシバを入れ、動力によって杵が上下することでスギ・タブのシバが製粉される。このような製粉する部分のこ

とを日下部報告では「搗臼」としている。正確に言えば、杵と臼であるが、水車研究者によると搗臼機と称することもある〔大石ら1992〕。

日下部報告には、杵への動力の伝達については記述がない。民平氏によると、水車・水力タービンから得た動力は芯棒に伝わって回転した。ギアをつけて、回転速度を減速できるようにしていたという。芯棒の要所要所にナデと呼ばれる突起がついていた。芯棒が回転すると、ナデも回転し、ナデが杵に当たることで、杵に動力が伝達される仕組みになっていた。

日下部報告では、臼の大きさは上側直径2尺（約61cm）、深さ2尺5寸（約75cm）で、搗臼の重量は約10貫（約37kg）であるというが、杵の部分についての記述はない。水車を使用していたときには24個の「搗臼」を動かしていたが、タービンになってからは設計ミスで8個の「搗臼」を動かしている、と日下部は記している。なお、『山林』では水車のときの「搗臼」は22個と記しており、『木の国山林時報』の記述と齟齬がある。日下部のいう「搗臼」とは、杵・臼を合わせた搗臼機のことである。搗臼機の部分について民平氏に確認すると、以下のように語った。

水車の両側にカラウス（唐臼）とドウツキ（胴搗き）があった。前の列にカラウス、後ろの列にドウツキが並んでいた。カラウス12ぐらい、ドウツキ12ぐらい、合計24基あった。カラウスはアラニツク（荒く搗く）。シバからすぐつく。カラウスは横（杵）、ドウツキは縦（杵）。ドウツキは檜の木だった。

カラウスは休むときに天井から縄で吊り上げる。落とすときは吊り糸をはずすと、とんとんとんと、つく。ドウツキは重い。大きなカシで作っている。どすんどすとやる。杭を差し込むと止まるようになっていた。

臼の底は金床になっている。石では減ってしまうから。カラウス・ドウツキの先も金。鉄だった。印南の金鳥⁽⁹⁾では、長い溝の臼になっていた。自分の家では、壺の臼だった。

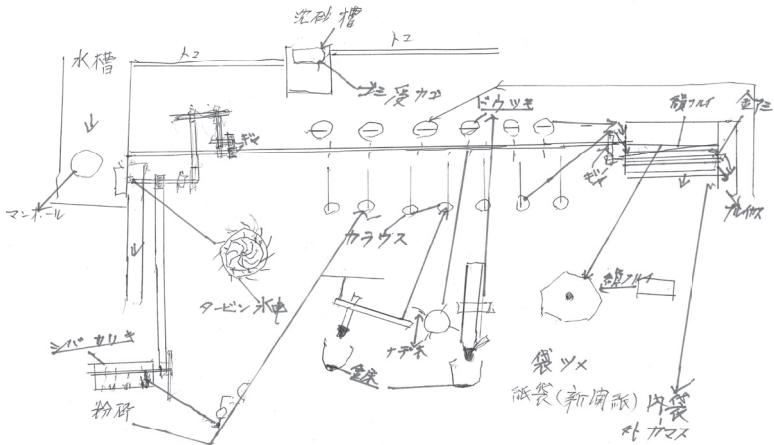


図1 三栖民平氏が描いた線香水車小屋の構造

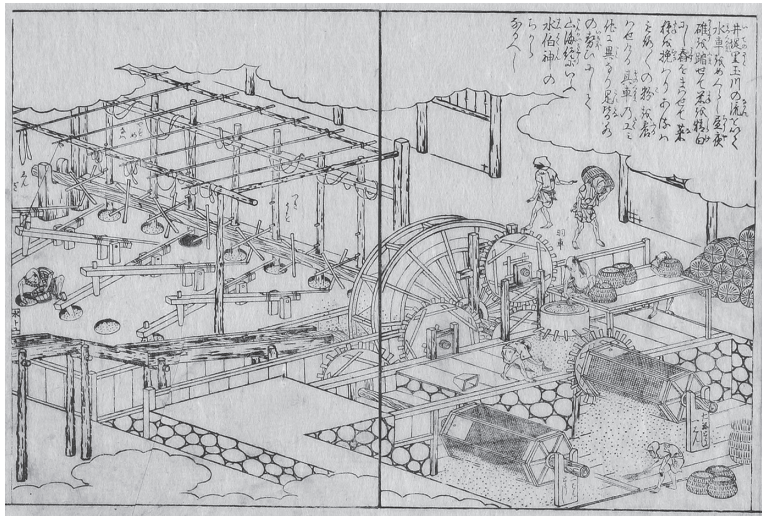


写真9 『拾遺都名所図会』「卷之四前朱雀」(1787年刊行、国際日本文化研究センター所蔵)に描かれた現在の京都府井手町の水車小屋内部(中央に水車、奥では横杵・縦杵、手前には挽臼・六角篩がみえる。)

現物および水車小屋内部の写真が残っていないので詳細は不明であるものの、民平氏の描いた図1および、語りからは杵・臼は水車の両側に前後2列で配置されていたことが分かる。前列と後列で杵の形態が異なっており、前列が横杵（カラウス）、後列が縦杵（ドウツキ）となっていた。後述する篩の部分の語りを合わせて考えると、横杵は荒く搗き、さらに細かくするために縦杵を用いた、ということのようである。線香水車の杵・臼については、地域や家ごとに形態や本数はさまざまであった。近隣の線香水車でいえば、すさみ町の井潤家の線香水車も横杵と縦杵が併存していた。また、三重県南部でも同じ構造の線香水車が確認されている。なお、三重県では横杵をナゲ、縦杵をドウツキと呼んでいる〔久保2009など〕。しかし、後述するように、横杵・縦杵の並存型の線香水車は、全国的な形態ではないようである。また、臼の形状については、福岡県八女地方でも、昭和中期ごろには効率化のために壺臼から長臼に変化している〔大石ら2011〕。三栖家の場合は、臼の形状を切り替える前に製粉を廃業したことになる。



写真10 すさみ町井潤家の横杵
(山下桃子氏提供)



写真11 福岡県八女市の縦杵と壺臼
(2019年3月撮影)

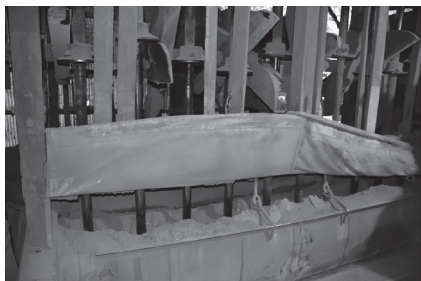


写真12 福岡県八女市の縦杵と長臼
(長臼の中に製粉したスギ粉がみえる)
(2019年3月撮影)

第2節 製粉の工程

乾燥して裁断したスギ・タブのシバは、搗臼に入れて製粉工程に入る。日下部は、約一昼夜搗いてから篩に入れ、「篩の糟」は再び臼に回すようにする、と記している。民平氏はこの工程について、以下のように語った。

一晩じゅうついていた。カラウスとドウツキで搗いていた。毎日搗いた。午前中はだいたい篩の作業。天井から壁から（飛んだ粉を）はき集める。家全体が箱みたいだった。窓も下の窓だった。一晩ついで、昼までにアゲカエ（上げ替え）。ヒョウニツメル（俵に詰める）。

カラウスで搗いたものをすくって運んで篩に入れた。カラウスで搗いたものを篩でふるたあと、ドウツキで搗いた。カラウスはシバやから徐々に足していく。カラウスで搗くとふわっとしたものになるので、あとへあとへ入れていく。量が減ってくると足していく。ドウツキは入れたまま。合併してふるう。それをドウツキに入れる。



写真13 すさみ町井潤家の篩（2020年7月撮影）

先述したように日下部の報告では、横杵・縦杵の区別が記されていない。そのため、カラウス（横杵）とドウツキ（縦杵）での製粉の順序・役割区分などは記されていない。民平氏によると、カラウス（横杵）は荒く搗き、篩にかけたあと、ドウツキ（縦杵）でさらに細かく製粉したということになる。民平氏は「ドウツキは木粉に近いものになる。ドウツ

キの部分が多いと粘りが少ない。」とも語る。横杵・縦杵の順序・役割区分については、すさみ町の井澗家の線香水車も同様であるという。

「搗臼」の右側の末端には「搗臼」で製粉した粉を篩にかける場所があった。日下部はこれを「動力利用の絹布篩装置」と記している。民平氏に確認すると以下のように語った。

篩室は密閉している。篩は1か所。戸を開けてかきだす。全体に傾いている。おじいさん（民治）が発明したらしい。二重になっている。外に絹篩がある。丸い篩ではなく、角があるとふるうのによかった。中に荒い金網篩がある。ここから漏れたものを絹篩でふるう。絹篩は外からはめこむ。窓のようなかっこうにしている。絹やからすぐ破れる。破れると障子のように貼った。

三栖家に伝わる「線香仕上部勘定帳」には、大正時代の明細に5円程度の「絹代」という支出がしばしば記載されている。おそらく、この絹代というのは民平氏が語る、絹篩の張替え用であったと思われる。また、同じく三栖家に伝わる「製香部台帳」には、篩の製造・販売元について「篩絹売捌元 京都西陣笹屋町大宮西へ入町 精好屋弥七郎方」、「篩絹製造元 京都市智恵光院笹屋町下ル 江羅直三郎」と記されている。篩絹売捌元の精好屋弥七郎については、明治16年（1883）の『都の魁』「織物之部」において、篩精好絹織製造所として、店舗の絵入りで京都西陣笹屋町大宮西入の精好屋長寫弥七郎と記されている。篩の購入元について、民平氏に確認したが、まったく知らないということであった。

日下部の報告には、スギ・タブの製粉工程は同じであるが、スギ粉はいくぶん製粉が容易である、と記されている。民平氏からはこうした違いについては語られなかった。ただし、以下のようなスギとタブの製粉の際についての話があった。

スギを搗くときは、タブの気配がないくらい掃除してから搗く。スギ粉を搗くときは別の時間。毎日搗くわけではない。混じってしまうと品

質が落ちる。

民平氏が知っている時期には、大半がタブ粉の製粉であった。民平氏自身もタブ粉の製粉がおもであった。なお、民平氏の語りから、水車小屋の中は粉が飛んでいるので大変な作業であったことが分かる。

粉は建物そのもので閉じ込める。大変な仕事だった。(製粉の作業をしていると) まっ黄になった。粉飛ぶちゅうもんと違う(粉が飛ぶ、というようなものではなく、小屋全体が粉まみれになっている)。窓や壁についた粉を履き落とした。夏には顔にも積もった。仮面をかぶったみたいになった。1日もかかさず風呂に入った。子どものころ、こんなんやらん(こんな仕事やりたくない)、と言うたことある。

また、民平氏によると製粉作業は火事が恐かったという。

白の底に敷板があった。かーん、かーんと鳴り出したらあかん(いけない)。油の潤滑の補充を忘れたらあかん。

つまり、摩擦熱で火花が出て、粉に引火して火事になることを恐れていた。民平氏は、夜に音が止まると見に行ったことがあったという。機械室を開けると火が出たため、母屋に走り、桶に水を入れてかけた。桶に麦が入っていたため、うまく火が抑えられたという。火事を警戒していたのは、他の線香水車小屋でも同様であった。

第6章 荷造りと出荷

製粉した製品は、荷造りのうえで出荷した。日下部の報告では、従来は10貫(約37kg)俵であったが、現在は15貫(約56kg)にして出荷している、と記している。日下部の報告にはこれ以上の記述はない。民平氏に荷造りと出荷方法について確認した。

外はカマス。中は紙の袋。新聞紙やセメント紙を貼り合わせた。ものすごい、かしめる（締める）。ばんばんに叩いて絞り切って送った。真砂まで肩で担いで行った。山をひとつ越して歩いた。

3俵を積んで荷車で運んだ。坂を上がる時、後ろを押した。子どもでも押すと楽になる。自分も押した。

真砂にあった宮尾の倉庫に粉を運んだ。

真砂から川船で下った。下りは安い。（古座から貨車で送ったのか、と聞くと）そこからは知らない。船に積み込んだかもしれない。

民平氏によると、川船を用いてスギ粉・タブ粉を河口まで運搬していた。文献によると、昭和初期までは川船が通っており、河口まで5時間あまりかけて物資を運搬したという〔檜垣1993、古座川町史編纂委員会2010〕。天保10年（1839）に完成した『紀伊続風土記』には、河口より真砂まで6里（約24km）であり、此れより上流には川中に岩が多く、川幅も狭いため船は通行できないと記されている。山間部より薪炭などの産物を積み出し、河口部より米や日用品が運ばれた。真砂は川船の発着地としてにぎわったという〔「角川日本地名大辞典」編纂委員会1985〕。現在も川船の船着き場跡が残されている（写真14・15）。



写真14 真砂の船着き場跡
（2020年12月撮影）



写真15 真砂の船着き場跡より古座川
上流を望む（2020年12月撮影）

三栖家に伝わる「線香仕上部勘定帳」によると、大正から昭和初期にかけての時代にも、製粉したスギ粉・タブ粉は川船を利用して河口の古座まで運搬していた。昭和6年生まれ民平氏も「線香仕上部勘定帳」に記載

されている真砂の問屋や倉庫のことを知っている。民平氏自身は、昭和20年代に民治の跡を継いで製粉業をおこなっている。その当時にも川船があったと語る。ただし、実際に川船に積み込んで運ぶところは見ていなかったようであり、川船で線香粉をいつまで運んでいたのかははっきりしない。

第7章 製粉業に関連する民俗

「線香仕上部勘定帳」には、大正12年(1923)の明細に「サイラ代」が6円75銭という表記がみられる。このことについて、民平氏に確認すると、以下のようなことを語った。

12月にサンマを樽でのぼしてきた。取り寄せて、正月の寿司に売った。樽でのぼってきた。山の人に売った。毎朝来るから、その人たちに売った。(平井からタブを売りに来ていたおばさんたちに売ったのか、と問うと) そういう人たちに売った。(タブを売りに来て、帰りにサンマを買って帰ったのか、という) そういう感じだった。正月はサエラの寿司が絶対に必要だった。ほとんど魚は干物だった。(なれ寿司にしたのか、と問うと) なれ寿司にもなる。寿司箱があった。

熊野地方では、サンマのことをサイラ、サエラなどと呼んでおり、とくに正月にサンマのなれ寿司を食べる習慣が広がっている〔杉中1998〕。古座川上流域ではなれ寿司に限らなかったようであるが、やはり正月にサンマの寿司は欠かせなかったという。毎年の購入記録は見当たらないため、大正12年には臨時でサンマを大量に必要とすることがあったかもしれない。しかし、三栖家は川船を使って河口部からサンマを仕入れておき、付き合いのある山の人たちに売ることがあったようである。一方、平井の女性たちにすれば、山を越えてタブシバを売りに来た際に、サンマを買って帰ることは好都合であったと思われる。おそらく、平井の人たちは、沿岸部からの物資が集まりやすかった佐田まで、その他の日用品についても買いにきていたと考えられる。以上のように、タブシバの仕入れ、線香粉の出荷にともなって、この地域の正月魚が取り引きされていたことが垣間見える。

第8章 まとめと今後の課題

これまで、和歌山県南部における線香原料製粉業や製粉場（線香水車）の実態については断片的な文献があるのみで、まとまった研究は皆無であった。今回、大正時代の古文書・昭和初期の報告をもとに、製粉業の体験者への聞き取りをおこなったことで、古座川流域における線香原料製粉業および線香水車の一端を明らかにすることができた。

本稿で解明できたのは、①製粉場（線香水車小屋）の立地、②線香原料製粉業者の設備・作業工程である。①の製粉場（線香水車小屋）の立地については、原料の調達、水力の確保、製品の搬出、などを総合的に考えて選択したものと推測できる。線香原料となるスギ・タブのシバは、佐田よりひと山越えた平井（佐田より上流）辺りから集めることができた。また、製粉した製品は、佐田よりひと山越えた真砂（佐田より下流）より川船を使って出荷していた。山から原料を集めやすく、製粉した製品を出荷しやすい場所に水車小屋を設置したことがうかがえる。こうした線香水車小屋の立地は、福岡県八女地方の線香水車でも同様のことが指摘されている〔池森ら1990、大石ら1992〕。

②については、以下のようなことが分かった。まず、線香の原料となるスギ・タブのシバ（枝葉）を採取する必要がある。次に、スギ・タブのシバを乾燥したあと、水車・水力タービンで回す搗臼機で製粉した。製粉設備については、三栖家の場合は昭和10年代に水車から水力タービンに変更していたことが分かった。搗臼機については、横杵と縦杵の並存型で、横杵で荒く搗いたものを篩にかけたあと、縦杵でさらに小さな粉に製粉していた。水車研究の第一人者である池森寛氏（西日本工業大学名誉教授）によると、このような横杵・縦杵の並存型は紀伊半島に特有の形態ではないか、という⁹⁰⁾。九州地方や関東地方の線香水車は縦杵のみであるという。現状では紀伊半島の線香水車については記録や研究が限られているため、今後の調査のなかでさらに確認していく必要がある。

本稿で触れられなかった点は、歴史的な変遷である。三栖家の製粉する粉の割合や出荷先は時代とともに変化していた。大正末期まではおもに仏

壇用線香原料としてのスギ粉出荷が大半であった。ところが、大正中期ごろから蚊取り線香会社が急成長し、粘結剤としてのタブ粉需要が激増すると、三栖家の製粉もタブ粉が中心となり、蚊取り線香会社への出荷が増加した。三栖家の線香原料製粉業は明治 27 年（1894）から昭和 20 年代まで 4 代、約 55 年にわたって継続された。また、大正時代には線香製造業も手掛けていた。日下部の報告には、三栖家の事業が成功した理由として、三栖家の人々が勤労であったことに加えて、「自給労力」による製粉業に徹していたためであると記されている。しかし、約 55 年の間にも事業内容は社会の動向を見極めながら戦略的に変化させていると思われる。このような歴史的な変遷については別稿でまとめる予定にしている〔藤井 2021c など〕。

本稿では古座川流域の三栖家の製粉場（線香水車）と製粉工程について取り上げた。今後も、すさみ町の井澗家など、和歌山県南部に点在していた線香原料製粉業および線香製造業の事例を集め、具体例を報告していく予定である。

(注)

- (1) とくに和歌山県北部において、自治体史、神社史、自治体の文化財調査、博物館特別展の協力調査、科研調査、近畿大学民俗学実習の調査、近畿大学民俗学研究所の調査、などにおいて、昭和初期から中期にかけての生業を把握するなかで調査してきた。
- (2) 和歌山県有田市の三和インセクティサイドの社史を編纂した〔三和インセクティサイド社史編纂委員会 2019〕。
- (3) 紀伊半島では唯一、和歌山県すさみ町に線香原料を製粉した水車が現存している。現在、水車小屋の所有者、および地元の有志を中心に、その修復・復元プロジェクトが進行している。水車所有者の井澗和良氏、およびご子息の井澗洸介氏・山下桃子氏が中心となって進められている。筆者はこのプロジェクトに触発を受け、令和 2 年（2020）7 月より、紀伊半島南部における線香製造と線香原料製粉・線香水車について調査を進め始めた。なお、井澗家の線香水車については、山下桃子氏が中心になり、近畿大学民俗学研究所紀要『民俗文化』33 号に報告する予定である。
- (4) 昭和 14 年の日下部報告には、和歌山県七川村の三栖民治と記されているのみで、製粉場の場所を特定する情報が見当たらない。『古座川町史』などの郷土史を見ても線香原料製粉に関する記述はまったく見当たらない。そこで古座川町教育委員会（住吉友樹氏）に問い合わせたところ、古座川上流域で線香の原料を製粉していたという話は聞いたことがあるということであった。後日、古座川町文化財保護審議委員長の辻新氏より、三栖民平氏が田辺市に居住していることを教えていただいた。

なお、浅里耕一郎氏が三栖民平氏への聞き取りなどをもとに、『木に生きる ―紀州田辺木材史―』に「線香」という項目を執筆していたことは、民平氏への聞き取り調査後に分かった〔田辺木材協同組合 2003〕。

- (5) 『木の国山林時報』154号〔日下部 1939a〕と『山林』676号〔日下部 1939b〕の「杉及び楠葉による線香原料の製造の実際」については、榎・棕櫚・コウヤマキなどに関する文献調査をおこなっていくなかで見出した。なお、『木の国山林時報』154号と『山林』676号の報告は、ほとんど同じ文章であるが、わずかに差異がみられる。本稿においてその差に注目する場合はその都度引用文献を付すが、記述に差異がない場合は引用文献を付さないことにする。
- (6) 令和2年(2020)11月27日、12月4日、令和3年3月26日に三栖民平氏を訪問し、聞き取り調査をさせていただいた。令和2年12月4日については、山下桃子氏も同行した。令和3年3月26日の調査は、ある程度まとめた原稿を事前に郵送させていただいたうえで、確認の聞き取りとして実施したものである。
- (7) 千郷千畝歩の冊子については、三栖民平氏の家で閲覧させていただいた。千郷家は、大正12年(1923)の初めごろ、千畝歩の父が真砂(現在の古座川町)の旅館の旧家を買って、佐田小学校の運動場の真下に家建て、大正13年の初めにかけてもとの上地の家を解体して移り住んだ。この移住について、千畝歩は「田舎から大都会へでも出て来たかの如き」と書いている〔千郷 1983〕。ダムに沈む以前の佐田中心部のにぎわいがうかがえる。その後、千郷千畝歩は昭和10年(1935)から18年にかけて七川小学校の教師をしており〔七川小学校百周年記念事業実行委員会 1976〕、三栖民平氏も習ったという。
- (8) 山下桃子氏よりこのことを事前に聞いていたため、筆者から三栖民平氏に対して、水車の下をシャミセンドウと呼んでいたか、と質問したことに対して語られた。
- (9) 印南町の金鳥とは、日高除虫菊株式会社のことを指している。「線香仕上部勘定帳」によれば、昭和3年(1928)以降に、「印南町 日高除虫会社」などに「のり粉」(タブ粉)を出荷していることが記載されている。日高除虫菊株式会社は、大正6年(1917)に設立されたあと、昭和4年(1929)に大日本除虫菊株式会社の系列に入っている〔畑本 2011〕。金鳥とは大日本除虫菊株式会社の商標である。
- (10) 令和2年(2020)11月27日、すさみ町において井澗家の水車修復・復元を目指すための「水車の会発足検討会議」が開催された際、池森寛氏よりご教示いただいた。

(参考文献)

- 池森寛・大石道義 1990 「福岡県八女地方の線香水車 ―水車場敷地(1)―」『産業考古学』55
- 内丸最一郎 1954 『水力タービン』 技報堂
- 大石道義・池森寛 1992 「八女地方の線香水車」平岡昭利編『九州水車風土記』古今書院
- 大石道義・長渡隆一・池森寛 2011 「福岡県八女市山内で稼働していた熊谷水車動力源線香粉工場について」『総合学術研究論集』1
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1985 『角川日本地名大辞典 30 和歌山県』 角川書

店

- 日下部兼道 1939a 「杉及び柃葉による線香原料の製造の実際」『木の国山林時報』154
- 日下部兼道 1939b 「杉及びタブ葉による線香原料の製造の実際」『山林』676
- 日下部兼道 1939c 『農山村副業叢書 11 棕栢の栽培と利用』大日本山林会
- 久保咲恵（三重県立熊野古道センター）編 2009 『熊野杉葉線香ものがたり 蘇れ!ふるさと産業』三重県立熊野古道センター
- 古座川町史編纂委員会編 2010 『古座川町史 民俗編』古座川町
- 古座川町史編纂委員会編 2013 『古座川町史 通史編』古座川町
- 三和インセクティサイド社史編纂委員会編 2019 『三和インセクティサイド50年のあゆみ』三和インセクティサイド
- 杉中浩一郎 1998 『熊野の民俗と歴史』清文堂
- 千郷千畝歩 1983 『生いたちの記』私家版
- 大日本除虫菊株式会社社史編纂室編 1988 『金鳥の百年 大日本除虫菊株式会社百年史』大日本除虫菊株式会社
- 田辺町編 1930 『田辺町誌』田辺町
- 田辺木材協同組合編 2003 『木に生きる 一紀州田辺木材史一』田辺木材協同組合
- 七川小学校百周年記念事業実行委員会編 1976 『七川小学校百周年記念誌』七川小学校百周年記念事業実行委員会
- 畑本幹雄 2011 『いなみの除虫菊と菊会社』私家版
- 檜垣巧編 1993 『古座町・古座川町調査報告書』高野山大学社会学研究室・和歌山社会経済研究所
- 藤井弘章 2019 「和歌山県における櫛の民俗 一紀美野町の栽培・採取を中心に一」『民俗文化』31
- 藤井弘章 2021a 「線香・蚊取り線香原料としてのタブ粉の歴史」『文芸学部論集 文学・芸術・文化』33-1
- 藤井弘章 2021b 「タブ粉（線香原料）の歴史と民俗（仮）」『民俗文化』33（予定）
- 藤井弘章 2021c 「和歌山県古座川流域・三栖家の線香原料製粉業と線香製造業 一明治・大正時代を中心に一（仮）」『和歌山地方史研究』（予定）

（付記）

本稿は三栖民平氏の全面的なご協力をいただいたことでまとめることができた。民平氏をはじめ、三栖家の方々のご協力に感謝申し上げます。なお、三栖家の歴史を紹介することについては民平氏に確認していただき、了解を得ていることを明記しておきたい。

また、井澗家の水車プロジェクトがなければ線香関連の調査そのものを進めることがなかった。井澗和良氏・井澗洗介氏・山下桃子氏にはあらためて感謝申し上げます。

その他、お世話になったすべての方に感謝の意を表したい。本稿が和歌山県南部に存在した線香原料製粉業・線香製造業の実態解明、および井澗家の線香水車復活の一助になれば幸いである。

令和2年（2020）の線香原料製粉業・線香製造業に関する調査は、近畿大学民俗学研究

所の調査として実施した。

注記のない写真については筆者撮影である。

(参考資料)

杉及びタブ葉による線香原料の製造の実際

日下部兼道

スギの葉の粉末が線香の原料となり、又タブ（別名タマガス・イヌグス・榊・粘柴 学名 *Machilus Jhunbergii*, Setz.）の葉の粉末が線香の糊料として用ひらるゝことは、既に人の知る所であるが、さて之が事業として實際上如何に行はれてゐるかに至つては一般にはあまり知られて居ない様に思はれる。近年除虫菊線香は輸出品として極めて重要な産物となり、和歌山県下に於いてもその生産高は一ヶ年四、三四一、七五七円（昭和十二年）に及ぶ程であるから、之が製造上糊料として欠くべからざるタブ粉の需要も亦激増したのは当然である。特に事変以来は支那物の輸入が杜絶したため、最近斯業は頗る活況を呈し、之が製造を企つるものが各地にあらはるゝに至つた。以下は和歌山県下七川村に於いて、三栖民治氏の経営せらるゝスギ及タブ粉の製造状況を概略紹介したものである。

三栖氏の此事業は明治二十七年の創業以来実に、四十四年の沿革をもつてゐる。その間斯業も幾多の盛衰の跡があり、その盛んなる時は近在に同業者も二・三出来たが、衰期に入つては忽ちにして廃業するといふ風で、今日迄永続したものは同氏唯一人である。彼の事業は近年に至つては益々確実なる経営を続け、事変以来は一層の盛況を呈してゐる。之は実に同氏がその地方に於いても稀なる勤労家であり、彼の一家が拵つて孜々として撓まず事業に専念した賜物であるが、その経営法が事業を一貫して、すべて自給労力によるの主義を採つたことは、彼の事業に弾力性を与へた大なる理由である。即ち原料の柴の採集から製粉・荷造・運搬・発送に至る迄すべて自家の労力を用ひ、又動力の如きも水車を用ひて居るから、殆ど彼の事業には、現金支出を要しなかつたのである。かくて彼の永年の努力は酬ひられ現在では相当の産をなして、土地でも重きをなすに至つて居るが、相変わらず昔乍らの勤労が続けられてゐる。

彼の事業の過去の大半は、仏用の線香原料たる杉葉の製粉をなし、東京・大阪方面に販売して居たのである。同地方は杉の植林地が極めて多い関係上、近くに杉の伐採が行はるゝ場合、極めて安価な山手で、その枝葉を買取り之を自ら又はその家族によつて採集して、貯へ置き随時之を製粉するのである。

然し最近の数年間は已に述べた様に、タブ粉の需要が増加し一般の仏用線香の糊料とする外、除虫菊会社等よりも、蚊取線香の固着剤として注文が多く、而もその価格は極めて高騰したから、殆どタブ粉の製造に没頭して居る。その原料たるタブ柴（枝・葉）は、各地に点在するものを買取るのであるが、最近製品価格の高騰によつて「タブ柴」も、殆ど従前の二倍の高値を示し、生葉十貫に付八拾銭にて買入れて居る。此の程度の価格であれば二十年生位にて、一本に付十貫の枝葉を採取する事は困難ではなく、而も二・三年目毎に採取出来るから、造林上の経済樹種となり得るかの様である。然しその将来性に就いては、尚十分検討しなければならぬ。

次に彼の製粉の設備、及製粉の方法に就いて見ると、最近は「水力タービン」（八馬

力)のものを据付けて、之を動力として居るが、従前は永く水車を用いたものである。(落差三〇尺水量二個)現在用ひてゐる水力タービンは、設計の齟齬で十分の馬力が出ず、減水期で漸く八個の搗臼を動かして居るに過ぎないが、従来の水車によると水量の多い季節には、全臼数二十二個の搗臼を動かしてゐたと言ふことである。(搗杵の重量約一〇貫)臼の大きさは上側直径二尺・深さ二尺五寸である。右の臼の外に柴の裁断器があつて、之は彼自ら考案したもので、右の動力を利用する様にしてゐる。更に搗粉は篩別するため、動力利用の絹布篩装置がある。以上が工場の主なる設備である。

製粉するには原料柴(杉タブの枝葉)を十分乾燥せしめなければならぬ、此乾燥が良品を得るに最も大切な条件で、生葉採取後少なくとも一ヶ月-二ヶ月間位は、風通しのよい日蔭に積み置き、乾燥したのから順次製粉するのである。原料柴は葉のみを用ひるを要せず、径一分迄位の小枝のまゝ用ひて差支へない。乾燥原料は次に、裁断器にかけて文字通り寸断する、その細片を搗臼に入れて約一昼夜位搗かせて、之を篩にかけ製粉工程を終る。篩の槽は再び臼に廻す様にするのである。杉及タブ粉共に製法は大体同じである、唯杉粉は幾分製粉が容易である。荷造は十五貫俵(従来は十貫俵であつたが運賃の関係上十五貫とした)とし、需要地に発送するのである。

最後に右工場の生産能率と、取引の相場に就いて見ると生産能率は水力の如何により一定しないが、最近数年の平均より見ると、大体タブばかりならば一ケ年五-六千貫、杉粉を作つても一万貫を出ないと言ふことである。取引の相場は公表を好まぬから判然としないが、杉粉ならば十貫に付二円内外、タブ粉ならば七、八円と言ふ所であらう。勿論品質により相違する。販売先は震災前迄は東京方面にも出したが、震災後は大阪を主とし殊にタブ粉は、和歌山県下有田郡の除虫菊製造会社に販売して居る。

尚此の事業の経営に就いて注意すべき点を見ると、先づ原料その他の点より、山村の小工業として誠に好適であるが、製品の価格の変動が大ききことは十分覚悟すべきで、如何なる不況に遭遇するも、三栖氏の経営の如く動力・労力等すべて自給主義によることにすれば、大きな失敗がないわけで、一時に大経営に走らず細く長くの主義で一貫すべき事業であると思はれる。

(『山林』676号)